

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2022年

No. 133

2022年4月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2022 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2021報告……………	1	今月のブックガイド……………	9
いつきの“ヒューマン・ピーイング” ^⑬ ……………	7	JASEインフォメーション……………	10
多様な性のゆくえ ^⑯ ……………	8		

◎ SEE 性教育アカデミー 2021 報告

みんなで考えよう 私たちの SAR プログラム

SEE 共同代表、大阪大学大学院准教授 野坂 祐子

SAR プログラムについて学ぼう

“おうち性教育”ブームのなかで性教育に対する社会的関心が高まり、性にまつわる支援の必要性が強調されるなかで、性教育や支援に携わる人の育成やスキルアップは大きな課題である。また、包括的セクシュアリティ教育においても、子どもや若者が性に対する態度や価値観に気づき、見直していくことは中核的な学習目標とされており、教育や支援にあたる実務家がまず、自分自身の性に対する態度に向き合うことが求められる。〈教える〉学習から〈対話〉^{ダイアログ}による学び合いへと、教育や支援のあり方の変化が求められている。今、性に関する実務家が対話を通して、性の学びを深めていく必要がある。

性に関する教育や支援に関わる人が、性に関する自己の価値や態度と向き合い、再構築するための研修プログラム SAR (Sexual Attitude Reassessment) は、諸外国の代表的な性科学・性教育団体において、その

受講が「専門家認定」の条件にされているものである。呼び名や研修の形式はさまざまであるが、いずれも自己覚知を目指した構造化された小グループ体験を通じた学びであり、視聴覚刺激(映像)が多用されるという特徴がある。日本でも SAR の紹介や「価値観や態度の見直し」を導入したプログラムが試行されつつある。

SEE (Sexuality Education & Empowerment) では、諸外国の代表的な研修内容を紹介しながら SAR の目的や手法を知り、日本の文化的・社会的文脈に沿った SAR 研修について考えていくためのワークショップとして、日本性教育協会(JASE)の協賛により「みんなで考えよう 私たちの SAR プログラム」を開催した。性にまつわる価値のなかでも、今回は「関係性における性」と「性の安全」をキーワードに、暴力や支配をテーマにした対話を体験するため、ゲスト講師として藤岡淳子さん(大阪大学大学院名誉教授・一般社団法人もふもふネット代表理事)をお招きした。

本企画は、2022年2月27日(日)に対面でのワ

ークショップ形式で開催された。大阪府立大学 I-Site なんばの会場にて、10時から16時30分の6時間半（休憩含む）の1日間研修であった。まん延防止等重点措置の要請下であったことから直前に参加を見合わせる方もあったが、後日の動画視聴者を含めて20名の参加があった。当日は参加者と講師で対話を深めた。以下、セミナーの概要を報告する。

性に対する信念・態度・価値観

まず、東優子（SEE 共同代表・大阪公立大学教授）から、「SAR：性に対する態度をみなおす・再評価する・再構築する研修について」の講義がなされた。

社会には、性に対するさまざまな信念や態度、価値観があり、そのなかには偏見や内在化された特権意識が反映したものもある。「子育ては異性愛男女に限定すべき」「マスターベーションは悪いことではないが、やりすぎではダメ」「浮気はダメ！絶対！」など、さまざまな言説がある。SAR研修は、自分自身がどういう信念、態度、価値観を持っている人間なのかを知り、偏見や価値観を再構築していくためのプログラムである。「自分と出会い直す研修」ともいえる。

性科学者のミルトン・ダイヤモンド（Milton Diamond）は、性を扱う際に気をつけるべきポイントとして、次の3点を挙げている。まず、性に関して、ある種の感情や態度が伴わない「事実」は存在しないこと。そして、一般的な話題や全体的な傾向について話したり、教えたりすることの必要性がある一方で、一人一人の人間は「平均」と一致することもあれば、劇的に異なることもあり、その人の問題を個別化することが重要であること。さらに、「何がどうである（事実）」「何がどうあるかもしれない（可能性・仮説）」「何がどうあるべき（価値）」のそれぞれは明確に区別して語られなければならない、ということである。性に対する価値は、常に意見が分かれ、流動的なものである。

「事実」をも変色させる個人や社会の都合の一例として、“Good”な性のありよう（正常・自然・健全・神聖）と、“Bad”な性のありよう（異常・不自然・病的・罪深い）を挙げたのは、ゲイル・ルービン（Gayle Rubin, 1984）であるが、こうした個人や社会の性に対する価値や態度を読み解く必要がある。

近年、性の多様性が言われるようになったが、その研修の多くはLGBTなど、性的マイノリティのありようを解説するものである。しかし、セクシュアリティの多様性は、性自認や性的指向だけではない。性には「自然」や「不自然」という価値が付与されており、時代によっても異なるもので、個人や社会の都合で変わっていくことを知っておく必要がある。

1970年代にWHOが性の健康を定義した文書に「人間のセクシュアリティの中核的要素」として入っていたのが、セクシュアル・プレジャー（sexual pleasure）である。プレジャーというと、直感的に「性的快感、快楽、喜び」といったイメージが浮かぶかもしれない。この概念がcomfortable、つまり、心地よい、抵抗がない、話題にしやすいものであるかどうか。最近、これがキーワードとして注目されているのは、性の健康と性の権利をつなぐ「忘れ去られてきたリンク（forgotten link）」として、「性の健康－性の権利－セクシュアル・プレジャー」のトライアングル・アプローチが提唱されたからである（GAB, 2016）。GAB^{（注1）}の定義を採用したWAS（性の健康世界学会）のセクシュアル・プレジャー宣言を読むと、言葉だけを聞いて直感的に感じたものとは違う印象を持つだろう。このように、深く考えたことがない性に対する自分自身の価値観、信念、態度を、人工的な場を作り出して向き合うのがSARのねらいである。

自分の価値観、信念、態度を知るといのは、WHOやユネスコが策定した国際セクシュアリティ教育ガイダンスでの学習目標にも掲げられている。「2.1 価値観とセクシュアリティ」における「自身の価値観、信念、態度を知るとは、それらに一致する性的行動をとるために必要である」という15～18歳の学習目標は、生徒だけでなく専門職にとっても求められよう。自分自身の価値観、信念、態度を知るといことをしてきたか。異なる価値観や態度と対立したときに、どうするか考えてきたか。価値観の違いによって起こるさまざまな対立があり、例えば、宗教的な価値観において避妊や中絶は絶対的な禁止事項になっているとき、クライアントに避妊や中絶を自己決定の選択肢の一つにできないことがある。しかるべきところにリファー^{（注2）}することで、対立を解決することができるなど、事前に考えておくことが大切である。

性を扱う専門職にも「価値観」の振り返りと再構

築が求められるのは、性教育へのアプローチの変化とも関わっている。価値観や道徳観を教え込むことから、価値ニュートラルな態度が求められるようになり、どうすべきか指示を出すやり方から、オープン・ディスカッションによる方法へと変わりつつある (Paalanen, 2018)。

SAR プログラムの実際

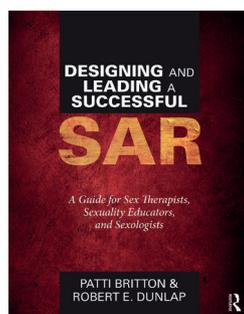
SAR プログラムは、1970 年代に米国で提唱され、欧州や英語圏を中心に世界各地で広く活用されているものである。性を扱う専門職の資格認定 (性教育の実践者を含む) にあたり、自分自身の信念、態度、価値観、偏見と向き合い、修正や改善が必要な場合、それを再構築するための研修プログラムとして SAR の受講を要件にしている例がある (例: 全米性教育者・カウンセラー・セラピスト協会、オーストラリア性科学学会、北欧性科学学会など)。

さまざまな書籍や研究論文が出されているが、最初期の Britton & Dunlap により紹介されているのは、講義が 40%、メディアに曝露される時間が 40%、グループワークから個別面談までも含む対話が 20% という構造である。メディア視聴は、鑑賞ではなく、感じる事が重視され、SEM (sexually explicit material: 性的に露骨・卑猥に感じられるような映像) が用いられる。SAR の目的は、あくまでも自己探求、自己理解のためのものであり、一般的な勉強や知識の習得が目的ではないと十分に理解しておく必要がある。性的な刺激にさらされるため、個人のトリガーがあるかもしれない。個人の問題解消を目的としたセラピーではないことが明確にされている。

構造化されたグループ体験 (Britton and Dunlap 2017)

- 講義/ゲストスピーカー 40%
- メディア曝露 (exposure) 40%
- 少人数によるグループワークや対話 20%

刺激材料としての SEM (sexually explicit material) は必須アイテム。鑑賞するのではなく、感じる事が大事



SAR の実際として、いくつか例を挙げたい。まず、オーストラリア性科学学会では、性教育者とセックス

セラピスト認定に「臨床サイコセクシュアル教育者」「臨床サイコセクシュアルセラピスト」の 2 種類があり、性科学に関する講座・研修を 216 時間以上受けなければならない。性教育者は、教育に関する何らかの資格が必要で、セラピストは、セラピストの資格に加え、性に関する臨床経験が求められる。どちらも 12 時間以上の性に関する態度や価値の自己評価を行う。

性科学で学位が取得できるカーティン大学大学院での SAR 教育は、セクシュアリティの基礎を網羅した一週間の集中講義 (40 時間) として開講され、討議やブレインストーミング、ビデオ視聴やゲストの招聘も行う。毎朝のリフレクション (ふりかえり) で、自分がどう感じたか、その影響要因などを深く内省する。また、今後の仕事にどう活かそうかを考える。一週間の SAR はコミュニケーションスキルの醸成にも役立つ。個人としても、専門職としても、自分のトリガー (引き金) が何なのか、何が OK で何が NG なのかを知っておくことは、非常に有益な経験になる。授業担当者でコーディネーターのジャッキー・ヘンドリック (Jacqui Hendrik) によると、課題や視聴覚教材の選択が難しく、一週間あっても時間は常に足りないとのことであった (詳しくは、SEE 作成動画『世界の学校性教育: それぞれの国における課題の乗り越え方』を参照されたい)。



<https://see-international-video.peatix.com/view>

別のプログラム例として、WAS 国際会議南アフリカ大会の参加者限定で開催されたワークショップ (2021) が紹介された。WAS と南アフリカ性科学学会の共催による 2 日間のプログラムである。2 日間というのは、資格認定の条件になっている場合などでは、おそらく標準的な日数であると思われる。初日にイントロダクション、グランドルールの説明、自己紹

介がファシリテートのトレーニングを受けた専門家によって進行される。

「セックスとは何か」「BDSM」^(注3)「バウンダリーを押し広げる」「エロティック・ボディ」というテーマが設定された4部構成で、各テーマにつき数分の動画を連続で8本程度視聴して、ディスカッションするというのが基本形である。主催者が選んだ動画には、さまざまな人種やシチュエーション、障害、セクシュアリティ等が描かれている。すべての動画はSEMとして比較的「刺激が強い」ものだが、ポルノとして作られたものだけでなく、ドラマやミュージックビデオのクリップを使ったものなども含まれる。挿入行為を伴うものに限らず、さまざまな性的行為・行動が描かれており、多様性が網羅されること、価値観の葛藤を喚起しやすいものであることなどが教材として選ばれるポイントになっている。動画だけでなく、同様の基準で選出された多彩なゲストによるミニ講演もプログラムに組み込まれている。

こうした動画視聴・ゲストスピーカーによるお話の後、各自でジャーナリング（書き留めるワーク）をし、さらに小集団による感想の共有、「ふりかえり」が展開されていく。各テーマについて、このパターンが4回繰り返されるというのが、2日間のプログラムの概略である。

前述のように、SARにはいろいろな形式があり、呼び名もSARとは限らない。最後に、講師（東）のハワイ大学大学院での経験から2つの事例が紹介された。まず、Pacific Center for Sex and Societyでは、週1回のペースで少人数のゼミ形式で、通称「セックス・セミナー」が開催され、10人程度のほぼ固定したメンバーが、セクシュアリティに関する様々な話題を学んだという。ゲストを招聘し、長めの動画を観てディスカッションを行うほか、フィールドワークやイベントがある。通年で行うため、相当な時間、繰り返しさまざまなものに触れることで新しい文化を知る。SARとは呼ばれていなかったものの、プログラムの内容はまさに意識していなかった内なる優生思想や差別や偏見に気づく、向き合う、自分と出会い直すものであった。

また、大学院のソーシャルワーク修士課程にも、セクシュアリティに特化した科目が設けられていた。そこで例えば、対人援助の場面において、価値ニュート

ラルな言葉を用いたとしても、非言語的なメッセージ（緊張した表情、そわそわした手元、耳が真っ赤など）がパワーを示すこともある、ということを知り、こうしたパワーを意識化するワークとして、クライアント役、ソーシャルワーカー役、観察者役の三人一組になり、非言語的・言語的なメッセージをフィードバックするワークを行うこともあったという。ある日のプログラムでは、マスターベーションという言葉について、否定的な表現の代わりになるものを書き出すゲームをしたり、スラングを出し合ったりすることもあった。相手が隠語や俗語を使っているのを支援者が専門用語に置き換えることが、利用者への拒否のメッセージとして伝わることもあるからだ。マスターベーションという用語を教室で口にするだけで、他の用語（「数学」「うがい」など）との感じ方の違いに気づくこともできる。

日本における SAR プログラム開発のために

このように、SARにはさまざまなプログラムがあるが、性に対する自分自身の態度を再評価するという点で共通している。典型的には、資格認定制度と絡めて16時間程度（2日間）の短期研修が一般的だが、40時間程度（一週間）の集中講義、もしくは大学の授業等で繰り返し継続的に学ぶものもある。

Sexual 性に係わる Attitudes 態度の再評価 Reassessment

研修の目標

- 自身の信念、態度、価値観、偏見に自覚的になる
- 自身の態度や価値観が仕事や個人にどのような影響を与えるかを理解する
※自己探求・自己理解（のプロセスを体験すること）が目的であり、知識情報の伝達（学習）や個人的な問題解消を目的としたセラピーではない

研修のメリット

- 性の健康を扱う専門家に必要な快適さ（comfort）→仕事上あるいは個人的なコミュニケーションスキルの向上
- 個人としての成長と健全な人間関係構築

SARを評価するには、そのプログラム内容がSARの達成目標に達するのにふさわしいものかを考えなければならぬ。刺激の強い動画に曝露させることが目的化しないよう、どういった教材がどういった目的・目標に適切なのかを吟味する必要がある。その際には、受講生の文化・社会的背景、肩書や職業も考慮する必要がある、それによってプログラムの中身は変わってくる。また、SAR研修への参加そのものがトラ

ウマ体験にならないよう、トレーニングを受けた専門家によるフォローアップ体制も必要となってくる。しかし実際には、受講生の数の問題などが影響して、なかなかそこまできめ細やかな対応やプログラム構成ができていない例が多いのではないかと想像する。

これから日本でも、性教育の実践者をはじめ、性の諸問題にかかわる専門職については価値観や態度を見直す研修の実施が広がっていく必要があるが、その前段階として（あるいはそれと平行して）SARプログラムの目的や方法について、諸外国の成果や教訓を活かしつつ、改善点を見つけ、それを共有していくことにより、日本の文化や社会の文脈に即した、性教育に関わる専門職に対して有効なプログラムを作っていければと思う。

性に対する自分の態度に気づく

講義のあとはSARに関する質疑を行い、午後からはワーク形式の学習に移った。安全な場で対話を行うため、グループワーク開始前に守秘と意見の尊重についてのグラドルールを説明した。

野坂祐子（SEE 共同代表・大阪大学大学院准教授）と吉田博美（SEE 事務局長・駒澤大学学生相談室臨床心理士）の進行により、小グループに分かれ、日常生活で体験した性にまつわる体験を振り返ることを目的に、「自分の性への態度や価値観に影響を与えた体験は？」をテーマにした話し合いを行った。小グループでは、それぞれの個人的な体験として、幼少期や思春期の体験から、大人になってからの人生経験など、幅広く話が出たようだった。

そのあと、全体のサークル（円座）になり、小グループで話し合ったことで何を感じたかを共有した。エピソードの詳細を問うのではなく、自分の体験を思い出したり、それを言葉にしたり、聴いてもらったりする体験が「どのように感じられたか」に気づくことを重視した。忘れていたわけではないものの、思い出すことのなかったエピソードが語られたり、何気ないできごとがその後の自分の行動や生き方に影響していることもあったりする。

初めて顔を合わせるメンバーもあったが、お互いの話を聞き、感想を共有するなかで、次第に表情がやわらいでいくのが印象的であった。

「暴力や支配」について考える

後半は、ゲスト講師の藤岡淳子さんの進行で、関係性における性をテーマに「暴力や支配」について考えるワークを行った。「1. いま私が感じているのは…」から「12. 今日、私が学んだことは…」までの12問のセンテンスが書かれたワークシートを使用して、「一問一答サークル」を行った。センテンスには、「私の職場で、セクハラは…」 「暴力が起きるのを防ぐのに人々がすべきことは…」 など、さまざまな性的言動や暴力にまつわる刺激語が含まれていて、自分の頭に浮かんだことを文章にして順に述べていく手法である。スタッフも含めた参加者全員が自分の意見を述べていき、一巡してから全体で気づいたことや思ったことを話し合う。



ワークの課題を口にしてみると、改めて「自分が思っていたこと」に気づくことができ、サークルのメンバーの意見を聞くと「なぜ、自分はそう思ったのか」をさらに深く考えることになる。シンプルなお題だが、回答は類似したものもありながら千差万別で、そう思うに至った理由や背景は実にさまざまであった。個人的な体験だけでなく、援助者としての境界線のあり方に気づく場面もみられた。

さまざまなトピックスのなかでも、「もし露骨に性的な文章や写真を受け取ったら私は…」のお題では、この文章から受ける印象やイメージに個人差が大きいことがわかり、議論は大いに盛り上がった。性暴力だと認識する場合もあれば、相手や文脈によって危険なものとは限らないという意見など、さまざまなコメントがあがり、それがまたメンバーの感覚や価値観の振り返りにつながったりした。もちろん、このワークには正解はなく、「どう感じたか」「なぜそう思うの

か」を考えることが学習の目的である。その点で、ワークの盛り上がりはSARの導入体験としても、とても有意義なものだったと思われる。

安全な場をつくること

「みんなで考えよう 私たちのSARプログラム」と題したSEEセミナーでは、SARとは何かという基本を共有し、SARの導入体験として2つのワークを実施した。これから日本でもさまざまなSARが開発されていくことが期待されるなか、まずはその意義や方法を性教育実践者に周知していく必要があるだろう。

そして、SARのような自己覚知を目的とした研修では、学び合いのための安全な場づくりが肝要である。とりわけ性に対する内容は、不快さや不調、葛藤を生じさせるトリガーとなりうる刺激が含まれることは避けられず、だからこそSARが必要であるわけだが、安全な場づくりや適切な課題を選定することの重要性を再認識した。今回、藤岡淳子さんを招いてワークを実施していただき、グループの対話を深めるためのファシリテートのスキルから学ぶところが多かった。

今後も引き続き、SEEでは、よい学びの場、支援者の育ちの機会を作っていきたい。対話を中心とした

性教育の進展に向けて、さらに取り組んでいくつもりである。

なお、今回の研修の講義を担当した東優子による「SAR (Sexual Attitudes Reassessment) : 性に対する態度をみなおす・再評価する・再構築する研修について」の解説は、受講後アンケートで寄せられたご意見を踏まえ、説明を補足した研修動画をPeatix (<https://see-sar-video.peatix.com/view>) で販売中である。



【注】

(注1) GAB (Global Advisory Board for sexual health and well-being) という「性と生殖に関する健康と権利」の専門家グループ。

(注2) リファーターとは、自分では十分に力になれないと感じられるクライアント（相談者）を、よりふさわしい人や機関に申し送りする（紹介する）こと。

(注3) BDSM (ビー・ディー・エスエム) とは、人間の性的な嗜好の中で嗜虐的性向をひとまとめにして表現する言葉である。「B」…Bondage (ボンテージ)、「D」…Discipline (ディシプリン)、「SM」…Sadism & Masochism (サディズム & マゾヒズム)



SAR
Sexual Attitudes Reassessment

**性に対する態度を
みなおす・再評価する
再構築する研修について**

**動画65分(配布資料付き)
1か月間見放題3000円**

東(ひがし)優子, MA, MSW, PhD
大阪府立大学大学院
人間社会システム科学研究科教授
Peatix (<https://see-sar-video.peatix.com/view>) で販売中

解説



SEE
性教育アカデミー2022